

令和7年度鈴鹿山地域高等学校活性化推進協議会のまとめ

令和7年12月

1 これまでの経緯

鈴鹿山地域では、令和4年3月に策定した「県立高等学校活性化計画」に基づき、鈴鹿山地域における高等学校の特色化・魅力化を図り、生徒にとって魅力ある学習環境を整備することを目的に、令和5年度に協議会を設置しました。

当協議会では、令和5年度に生まれた子どもたちが中学校を卒業する15年先までの中学校卒業者の減少の状況等をふまえ、当地域の県立高等学校を取り巻く状況や現状、今後の地域の少子化の進行、他地域の協議会での協議内容等の情報を共有しつつ、当地域においてこれから時代に求められる学びの提供を実現するため協議を進めてきました。また、令和6年度には当事者のニーズを把握するために、地域の中学生と保護者へのアンケートを実施しました。

令和7年度の協議会では、地域の中学生・保護者へのアンケート結果や、これまでの協議などをふまえ、15年先の鈴鹿山地域の県立高校の学びと配置のあり方を見据え、令和10年度までに想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応の方向性をとりまとめることとしました。

【参考】「県立高等学校活性化計画」（令和4年3月策定）抜粋

「これから時代に求められる学びを提供できる県立高等学校のあり方」

- ・これからの高等学校は、社会の変化をふまえ、持続可能な社会の創り手を育成することが求められており、そのため、豊かな社会性・人間性を身につけられる環境が一層重要となっている。
- ・3学級以下の小規模校活性化の検証結果、令和2年度に生まれた子どもたちが中学校を卒業する15年先までの中学校卒業者の減少の状況等をふまえると、これから時代に求められる学びを提供していくには、現行の高等学校の配置を継続していくのは難しい状況にある。このため、各地域の高等学校の学びと配置のあり方について検討を進め、その中で1学年3学級以下の高等学校は統合についての協議も行うこととする。これらについては、それぞれの地域の活性化協議会において具体的な内容を丁寧に協議することとし、協議が必要となる地域に協議会がない場合は同様の場を設けるものとする。
- ・こうした検討・協議は、統合という結論ありきで協議するのではなく、地域の実情に応じ丁寧に進めることとし、その際、状況に応じて、これまで取り組んできた、地域と連携した学びや学校独自の学びについての継承、交通が不便な地域における学びの機会の提供方策、分校化や校舎制への移行などについて協議することとする。
- ・次代の担い手となる三重の子どもたちがこれからも安心して学び、豊かな社会性・人間性が育まれる高校教育を進めていく。

2 当地域の県立高校を取り巻く状況

(1) 鈴鹿亀山地域の中学校卒業者数の推移と予測（含む社会増減）

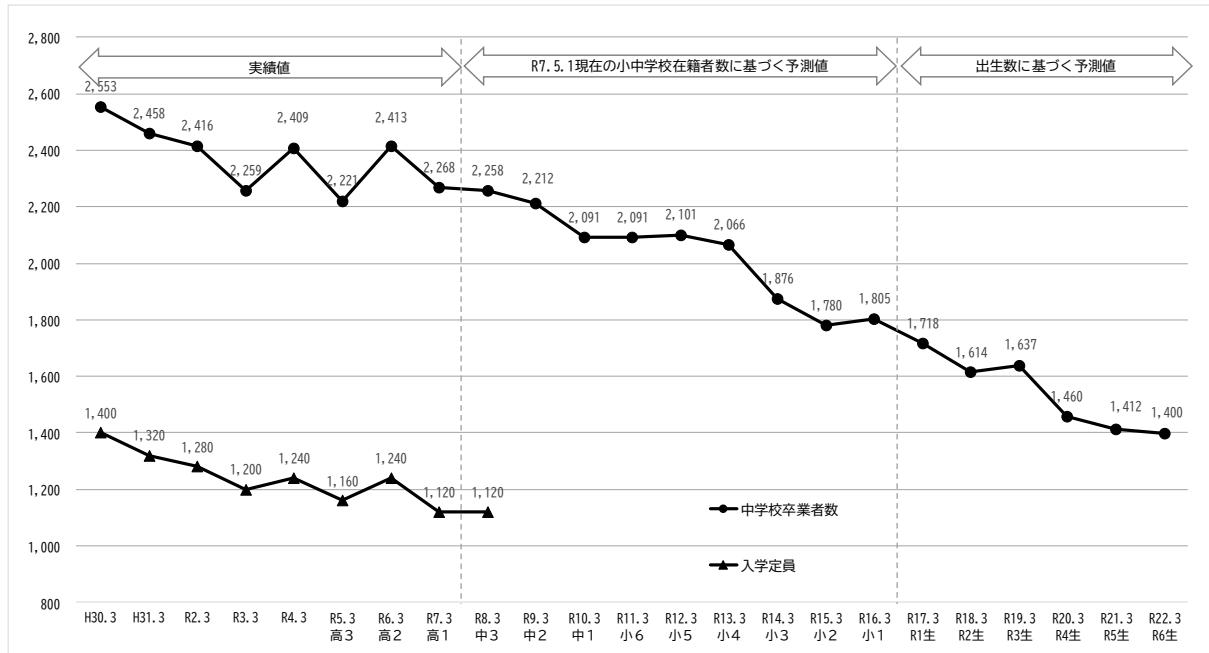
三重県の中学校卒業者数は、令和7年3月の15,718人から、令和16年3月には12,408人（令和7年3月比3,310人減）となることが見込まれており、引き続き減少が続きます。減少の度合いは地域によって異なりますが、当地域においては、以下の通り予測されています。

令和7年3月 2,268人

令和10年3月 2,091人（令和7年3月比177人 [7.8%] 減）

令和16年3月 1,805人（令和7年3月比463人 [20.4%] 減）

鈴鹿亀山地域の中学校卒業者数と県立高等学校入学定員（全日制）の推移



【鈴鹿亀山地域の出生数】

	H28年度生 現小3	H29年度生 現小2	H30年度生 現小1	R元年度生 5~6歳	R2年度生 4~5歳	R3年度生 3~4歳	R4年度生 2~3歳	R5年度生 1~2歳	R6年度生 0~1歳
鈴鹿市	1,643	1,545	1,507	1,508	1,376	1,400	1,306	1,211	1,199
亀山市	399	371	411	343	359	360	269	307	306
合計	2,042	1,916	1,918	1,851	1,735	1,760	1,575	1,518	1,505

また、令和6年度の当地域の出生者数1,505人に基づいた令和22年3月の中学校卒業者数の予測値は1,400人（令和7年3月比868人[38.3%]減）になります。

なお、当地域における学級減が想定される年度末の中学校卒業者数の推移を以下の通り予測しています。

令和7年3月 2,268人

令和9年3月 2,212人（令和7年3月比 56人 [2.5%] 減）

令和10年3月 2,091人（令和7年3月比 177人 [7.8%] 減）

令和13年3月 2,066人（令和7年3月比 202人 [8.9%] 減）

令和14年3月 1,876人（令和7年3月比 392人 [17.3%] 減）

令和15年3月 1,780人（令和7年3月比 488人 [21.5%] 減）

(2) 鈴鹿亀山地域の中学校卒業者の進路状況

鈴鹿亀山地域の中学校卒業者は、当地域の県立高校（全日制）へ33.6%が進学しており、地域の県立・私立・国立高専へは合わせて48.4%の生徒が進学している状況です。一方、他地域への県立

高校（全日制）へ 30%強、県外を含めた地域外の国公私立（全日制）の高校・高専へ 40%弱が進学しています。これは他地域に比べ、地域外への進学者数が多い状況です。

令和 7 年度の進路状況を見ると、他地域の県立高校（全日制）のうち隣接する四日市地域と津地域への進学者の合計が卒業者全体の 29.7% を占めています。その一例をあげると、四日市工業高校へ 105 人、四日市南高校へ 80 人、四日市商業高校へ 61 人、津工業高校へ 87 人、津商業高校へ 85 人、津東高校へ 46 人が進学しています。

<令和 7 年 3 月中学校卒業者の進路状況>

区分 年度	卒業者数 合計	鈴鹿亀山地域			地域外			その他	
		全日制 県立	私立・ 国立高専	地域内 合計	四日市地域 全日制県立	津地域 全日制県立	その他の 県立・私立・ 高専・県外		
R7.3 卒	2,268	761 33.6%	337 14.9%	1,098 48.4%	375 16.5%	299 13.2%	213 9.4%	887 39.1%	283 12.5%

※地域外：鈴鹿亀山地域の全日制の県立（6校）と私立（1校）と高専（1校）以外の、全日制高校・高専への進学者数

※その他：特別支援・定時制・通信制・各種学校への進学及び就職等の数

※小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、内訳と合計の割合が一致しない場合があります。

(3) 通学に係る学校までの所要時間と月当たりの通学費の状況

当地域の全日制県立高校に通学している生徒の通学時間は、60 分以内が 87.4%、90 分以内が 97.0% となっており、概ね 90 分以内で通学できています。

また、通学費用を金額別にみると、不要が約 5 割と一番多く、9 割近くの生徒が 9,000 円以内までとなっています。学校別にみても、概ね地域全体と類似の傾向を示していますが、飯野高校は 9,000 円を超える割合が、他校に比べ少し高くなっています。

【通学時間】(令和 7 年度在校生)

[単位：%]

通学時間	神戸 (872 人)	飯野 (457 人)	白子 (731 人)	石薬師 (284 人)	稻生 (461 人)	亀山 (584 人)	合計 (3,389 人)	積み 上げ
1 5 分以内	17.1	8.8	21.2	8.5	20.8	15.9	16.4	16.4
3 0 分以内	35.4	17.9	34.9	33.8	36.9	31.5	32.3	48.8
4 5 分以内	24.8	12.3	19.3	25.7	19.7	24.8	21.3	70.1
6 0 分以内	16.9	19.3	15.7	19.0	14.5	20.0	17.4	87.4
9 0 分以内	5.4	29.5	7.0	9.5	5.6	6.5	9.6	97.0
1 2 0 分以内	0.5	9.2	1.4	2.8	1.3	0.9	2.2	99.2
1 2 1 分以上	0.0	3.1	0.5	0.7	1.1	0.3	0.8	100.0

※小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、内訳と合計の割合が一致しない場合があります。

【通学費用】(令和 7 年度在校生)

[単位：%]

通学費用	神戸 (872 人)	飯野 (457 人)	白子 (731 人)	石薬師 (284 人)	稻生 (461 人)	亀山 (584 人)	合計 (3,389 人)	積み 上げ
不要	52.9	32.6	40.4	60.9	69.6	59.4	51.5	51.5
3,000 円以内	3.1	3.7	5.2	7.7	3.7	6.3	4.7	56.2
5,000 円以内	25.2	11.8	28.5	11.6	3.9	13.0	18.0	74.2
7,000 円以内	10.2	23.9	14.4	9.2	7.6	6.5	11.9	86.0
9,000 円以内	3.1	5.0	1.2	4.9	3.5	3.6	3.2	89.3
11,000 円以内	2.6	7.7	3.3	1.4	3.5	3.8	3.7	92.9
13,000 円以内	0.8	3.5	2.1	1.8	2.0	2.6	2.0	94.9
15,000 円以内	1.3	4.2	2.9	0.0	4.3	2.1	2.4	97.3
15,001 円以上	0.8	7.7	2.2	2.5	2.0	2.7	2.7	100.0

※小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、内訳と合計の割合が一致しない場合があります。

(4) 全日制県立高校卒業者の進路状況（令和7年3月卒）

令和7年3月の全日制県立高校卒業者の進路状況は、神戸高校は89.8%が四年制大学へ、飯野高校は29.9%が就職、27.1%が四年制大学へ、白子高校は34.9%が就職、28.3%が専修・各種学校等へ、石薬師高校は74.2%が就職へ、稻生高校は62.3%が就職へ、亀山高校は34.4%が就職、28.1%が専修・各種学校等へとなっています。

<令和7年3月鈴鹿亀山地域の高校卒業者の進路状況>

区分	四年制大学	短期大学	専修・各種学校等	就職	その他	計
人数	448 (40.3%)	57 (5.1%)	200 (18.0%)	352 (31.6%)	56 (5.0%)	1,113

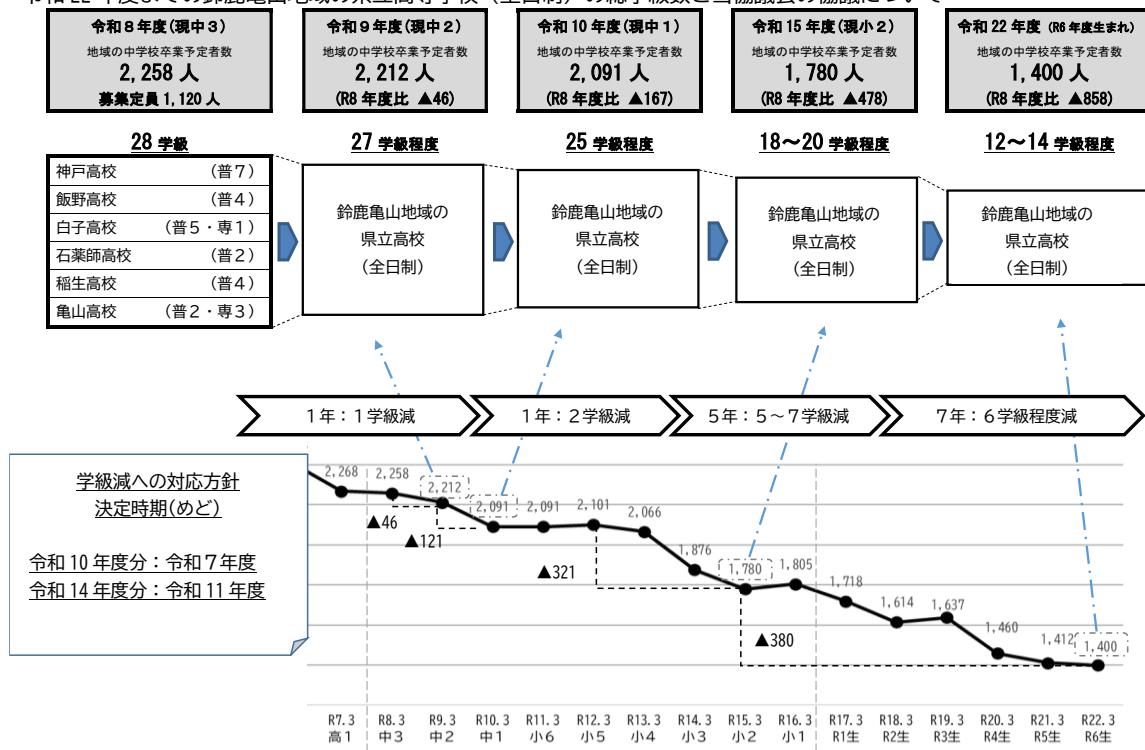
(5) 令和22年度までの鈴鹿亀山地域の県立高等学校(全日制)の総学級数と当協議会の協議について

学級数の想定には、主に、中学校卒業者数の減少、全日制高校への進学率、県立高校と私立高校の定員の割合の3つの要素が働きます。

これら3つの要素を、通信制高校への進学率が上昇し全日制高校への進学率が年々低下していることなど近年の傾向をもとにして、15年先まで当てはめると、15年先の令和22年度には、中学校卒業者数が約6割となるのに対し、1学年あたりの総学級数は、それ以下の割合にまで減少することが見込まれます。

今後の当地域全体の県立高校(全日制)の総学級数については、令和8年度の28学級(1学級40人として)から、令和9年度は1学級程度の減が見込まれ27学級程度となり、令和10年度にはさらに2学級程度の減が見込まれ25学級程度となります。さらに、令和10年度から15年度までの5年間では、5~7学級程度の減が見込まれ18~20学級程度となり、令和22年度には、12~14学級程度となることが想定されます。

令和22年度までの鈴鹿亀山地域の県立高等学校(全日制)の総学級数と当協議会の協議について



3 これまでの協議内容と主な意見

(1) これまでの協議会の概要

○ 令和5年度 第1回 令和6年1月24日（水）

「県立高等学校活性化計画」や、令和4年度に生まれた子どもたちが中学校を卒業する15年先までの鈴鹿亀山地域の中学校卒業者数の減少の状況等をふまえ、当地域において15年先に求められる（実現したい）学びや高校のあり方、今後の協議を深めていくための視点などについて協議しました。

○ 令和6年度 第1回 令和6年7月29日（月）

「県立高等学校活性化計画」や、令和5年度に生まれた子どもたちが中学校を卒業する15年先までの鈴鹿亀山地域の中学校卒業者数の減少の状況をふまえ、当地域において15年先に求められる（実現したい）学びや、高校のあり方について協議しました。

また、地域の中学生や保護者を対象としたアンケート調査の質問内容や実施方法等について検討しました。

○ 令和6年度 第2回 令和6年12月9日（月）

令和5年度に生まれた子どもたちが中学校を卒業する15年先までの当地域の中学校卒業者数の減少の状況や、中学生と保護者へのアンケート結果をふまえながら、当地域において15年先に求められる（実現したい）学びや高校のあり方、令和10年度以降に想定される県立高校の学級減への具体的な対応の方向性について協議を行いました。

○ 令和6年度 第3回 令和7年2月18日（火）

15年先までの当地域の中学校卒業者数の減少の状況や、中学生と保護者へのアンケート結果をふまえながら、当地域における高校の学びと配置のあり方の方向性、令和10年度以降に想定される学級減への具体的な対応について協議を行いました。

(2) これまでの協議会における主な意見

【鈴鹿亀山地域の高等学校の現状について】

○ 当地域の県立高校の学びの選択肢がこのままであれば、15年先までにかなりの学級数を減らさざるを得ない。しかし、四日市地域や津地域の専門高校へ一定数の生徒が流出していることをふまえると、鈴鹿市内の高校に工業、商業、農業などの職業系の専門学科を設置することで、学級数の減少を抑えることができるのではないか。市内の事業所からも人手不足であるという声が大きくなっている、ぜひ設置を検討してほしい。

○ 鈴鹿亀山地域の中学校卒業者の約4割が地域外の全日制高校へ進学しており、特に、当地域に設置されていない工業科や商業科へ一定数の生徒が進学している。そのため、これら職業系専門学科が当地域に設置されれば、子どもたちの地域外への移動が少くなり、学級減の必要もなくなるのではないか。

○ 普通科のコースの充実では、専門学科の学びと比べ、どうしても実習をはじめとした専門的な授業の時間が少なくなる。就職後、すぐに役立つスキルを身につけてもらうために、より専門性の高い学びが行われる職業系専門学科を設置してほしい。

○ 工業をはじめとする専門性の高い学びの充実は必要であり、普通科におけるコースの設置や他校との連携、資格取得の取組等、さまざまな方策を検討してほしい。

○ 当地域に専門高校をつくったとしても、他地域の実績のある専門高校を上回る魅力がなければ、近いというだけで生徒は選んでくれないだろう。

○ 少子化の中では、新たな専門学科の設置は難しいところもあるため、それぞれの県立高校は地域のニーズをふまえて特色化・魅力化に取り組んでいる。例えば、稻生高校の普通科では、6つのコースを設置し専門学科に近い学びを提供している。

- 工業高校を設置するには、施設整備のために多額の予算が必要となる。少子化が進む中にあっては、既存の学科・コースの学びに予算を投入し、時代のニーズに沿った専門性の高い学びを充実させるほうがよいのではないか。
- 大学進学を考えている中学生の多くが、四日市地域や津地域の普通科高校へ進学している。当地域の子どもたちを地域に残していくための取組をするべきではないか。例えば、当地域に公立の中高一貫教育校を設置するのも、ニーズがあれば1つの選択肢になりうるのではないか。

【部活動について】

- アンケートでは高校の部活動に期待する声も大きいが、中学校において部活動の地域移行についての議論が進められる中、高校の部活動を今後どうしていくのかについても重要な課題となるのではないか。
- 部活動が充実していることは、高校を選択する際の大きな魅力の1つとなっている。全ての高校が小規模化されて、十分な部活動ができなくなってしまわないよう、部活動の活性化という視点も大切にしてほしい。

【当地域の県立高校に求められる学びについて】

- 地元経済界としては、社会人としてのマナーや基本的生活習慣を身につけてもらった上で、DXに関わる教育や金融教育に力を入れてもらいたい。
- 保護者としては、大学進学や就職など、子どもたちの進路実現につながる学びを重視してもらいたい。
- アンケート結果を見ると、子どもたちは学校行事や部活動など、授業以外の活動にも期待していることがうかがえる。こうした子どもたちの思いをふまえ、地域のイベントに参加したり、協力したりするなど、地域社会とのつながりの中での学びがより充実することを期待したい。
- 中学校段階で、将来の進路を明確に決めるのは難しい生徒も多いため、稻生高校の普通科のように、多様なコースの中から、入学後に自分の興味関心に応じてコースを選択できるのは大きな魅力となっている。また、工業や商業などの専門学科と同じような資格取得が可能となれば、より魅力が高まるのではないか。専攻科の設置など、当地域の魅力や特徴を生かした新しい取組を検討してみてはどうか。

【地域との関わりについて】

- 地元の高校で学んだ生徒が、地元に就職することも大切であるが、他地域の高校で学んだ生徒や県外の大学に進学した生徒が、地元に戻って働きたいと思えたり、それを実現できたりする仕組みづくりも必要である。
- 人の役に立ちたい、地域の力になりたいと思っている地元志向が強い中学生は多い。四日市地域や津地域へ進学する生徒も一定数いるものの、当地域の各県立高校のニーズは高いと感じている。
- 地元で働きたいと考えている子どもたちに対し、将来、地域での活躍につながる特色のある学科を設置したり、地域の大学と連携して、高校から大学まで一貫した教育を進めていったりするといった方向性も考えられるのではないか。
- 小学生にとって高校生は憧れの存在であるため、高校生が小学生に専門性を生かした出前授業をしてくれたり、地域の行事で輝いている高校生の姿を小学生が見たりする機会を増やすると、地域の高校に進学したいと思う子どもたちを増やすことができるのでないか。

【多様な子どもたちの状況と学習環境への対応について】

- 当地域の小中学校には外国につながりのある子どもたちが多く在籍していることから、高校においても、外国につながりのある生徒を受け入れ、学びを支えていくという視点が大切である。
- 小中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の保護者からは、特別支援学校の高等部ではなく、県立高校への進学を考えた場合、選択肢が限られるという声を聞く。特別な支援を必要とする子どもたちや外国につながりのある子どもたち、不登校の子どもたちが増えている中で、こうした子どもたちが高校で安心して学べる教育環境を保障してほしい。
- 不登校など学校に行きづらい子どもたちが増えている中で、多様な学びを保障するためにも、定時制・通信制のあり方や、学びの多様化学校のような学校の設置を考えてもよいのではないか。
- 小中学校を含め外国につながりのある子どもたちに関わる教育は、当地域の強みであり、こうした子どもたちが他地域からも集まるような高校をつくるのも1つのアイデアである。

【交通に係る課題について】

- 亀山市から鈴鹿市内の高校へは交通の便がよくないため、亀山高校かJR沿線の四日市市や津市の高校を選択する生徒が多い。鈴鹿市内の高校へ通いたいと思う子どもたちのために、路線バスの経路の見直しや通学バスの運行などの支援をお願いしたい。
- 鈴鹿市と亀山市がそれぞれ独自で運行するコミュニティバスについて、市を越えて連携させ、鈴鹿・亀山間の交通の利便性の向上が図られるよう、当協議会から行政へ提言することを検討してはどうか。
- 鈴鹿市と亀山市のコミュニティバスの連携が進めば、通学だけでなく地域経済の活性化にもつながることから、県と市の交通行政が協力して進めていく必要がある。

【学校規模について】

- 小規模な高校では、生徒一人ひとりに丁寧な指導が行き届くというメリットがあると聞いている。一方で、いじめ等があった場合に、クラス替えが難しいなど、生徒の安心できる場の確保が難しく、その結果、退学を選択せざるを得なくなるケースがあるとも聞いている。統合や学級減を検討する際には、いじめ防止の観点からも慎重に考えてほしい。
- アンケート結果から、小規模校を望む声は一定数あるため、仮に再編することになったとしても、小規模校で行ってきた学びは、地域の高校で引き継いでいく必要がある。
- 学校規模が大きくなると教員数も増えるため、多様な選択科目を開講できたり、学校行事や部活動が活発になったりする。子どもたちがさまざまな選択ができるという点においては、統合によるスケールメリットは大きいと感じている。
- 国公立大学や難関私立大学への進学ニーズに応える一定規模の普通科高校が当地域に必要であり、各教科の教員数などをふまえると、理想は1学年8学級、最低でも6学級はあったほうがよい。
- 参考資料をみると、部活動の充実という視点では、1学年4学級以上の規模が必要である。

【今後の県立高校のあり方について】

- 令和10年度以降も中学校卒業者数はさらに減少していくことを見据え、県立高校の学びと配置のあり方を考えていく必要がある。また、令和7年度中に、協議会としての一定の結論を出すためにもスケジュール感を持って協議を進める必要がある。
- 15年後に1学年の総学級数が12~14学級となることが想定される中、普通科の一定規模の維持や多様な学びの選択肢の維持、部活動の活性化などを考えると、当地域の高校は2~3校程度に集約されるのではないか。今後、学校数と学級数のバランスに留意して協議を進めていく必要

がある。

- 当地域の高校の統廃合や学級減を考える際には、他地域の職業系専門学科への進学をどう捉えるのかを議論する必要がある。
- 中学生のニーズから、当地域に大学進学に対応する一定規模の普通科高校は必要であるが、過去の生徒急増期に普通科の定員を大きく増やしたことを考え、普通科を中心に定員を減らし、多様な子どもたちの学びを保障しつつ、学びを集約していく方向になるのではないか。
- 中学校段階で自身の進路が明確となっている子どもは少なく、高校に入ってから自分のやりたいことを見つけたいという生徒が多い。そのため、再編したとしてもオーソドックスな普通科は残してほしい。
- 現在、県内全域から生徒が入学している特色のある学科は、今後も当地域に残したほうがよい。
- これまで小規模校が果たしてきた役割は大きく、学級数が減ったとしてもその機能は残していく必要がある。
- 高校ではある程度の学級数がないと充実した教育そのものが難しくなることが想定される。当地域は、他地域と比べると小規模の高校が多いことから、通学環境も考慮して、近鉄沿線に高校を統合していくのがよいのではないか。
- 通学時間は子どもたちにとって重要であり、鉄道など公共交通機関の利便性を考えると、どの場所に集約していくとよいのかは見えてくるのではないか。
- アンケート結果を見ると、小学校、中学校、高校と校種があがるにつれて、だんだんと大きな集団の中で学び、多種多様な選択肢から自分にあったものを選んで社会に出ていくといった教育環境が求められているのは、今も昔も変わらないと感じる。こうした環境を維持するため、これまでに統合を行った高校のその後についての検証も行いながら、当地域の高校の再編について検討を進めてほしい。
- アンケート結果から、「積極的に統合すべき」、「一定の統合は避けられない」という回答が7割を超えており、当地域でも県立高校6校の再編も含めた検討を進めていかなければならない。
- 今後、統合を行う際には、今ある学びをそのまま残すのではなく、よりよい形で残すという発想が大切であり、時代にあわせて学びを充実させたり、新しい設備等に予算を投入したりして、魅力化を図ってほしい。

4 令和7年度の協議内容と主な意見

(1) 令和7年度の協議の概要

○ 第1回 令和7年7月10日（木）

15年先までの当地域の中学校卒業者数の減少の状況を見据えたこれまでの協議や、中学生と保護者へのアンケート結果をふまえながら、当地域における高校の学びと配置のあり方の方向性、15年後に想定される高校の学びと配置のイメージについて協議を行いました。

○ 第2回 令和7年9月9日（火）

15年先までの当地域の中学校卒業者数の減少の状況を見据えたこれまでの協議や、中学生と保護者へのアンケート結果をふまえながら、15年後に想定される高校の学びと配置のイメージおよび、令和10年度までに想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応案について協議しました。

○ 第3回 令和7年10月28日（火）

これまでの協議をふまえながら、15年後に想定される高校の学びと配置のイメージおよび、令和10年度までに想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応案について協議しました。

○ 第4回 令和7年11月20日（木）

前回に引き続き、15年後に想定される高校の学びと配置のイメージおよび15年先を見据えた令和10年度までに想定される学級減への具体的な対応について協議し、令和10年度入学者選抜（令和9年度実施）から石薬師高校を募集停止とし、県立高校6校を5校に再編し、特色化・魅力化を図るとの方向性をとりまとめました。

(2) 令和7年度の協議会における主な意見

【今後の学びと配置のあり方の検討の方向性について】

- 少子化の中、学校を新設することは難しいため、現在当地域にある学びの内容や施設設備を充実させることができ現実的な対応になるとを考えている。遠隔授業や既存の施設の活用など、授業のあり方を柔軟に考えながら、再編の方向性を考えてはどうか。
- 当地域から地域外の工業科や商業科に進学した生徒は、その高校の所在する地域の事業所に就職するが多く、当地域に就職することが少ないようだ。当地域の事業所における人手不足を解消するためにも、ぜひ、当地域に工業科を設置してもらいたい。
- 本県は全国的に見ても職業系専門学科の学びを大切にしている県である。どの学校も地域の産業界と連携した教育活動を行っており、子どもたちは、地元企業や地域のよさを認識した上で、卒業後の進路を選択している。
- どの地域も中学校卒業者数が減少している中、新たな学科を設置して地域間で生徒の取り合いをするよりも、今ある学びを大切にして、学科や学校生活の魅力を高めていく方が、成果は出やすいのではないか。
- 飯野高校の応用デザイン科や英語コミュニケーション科は非常に特色があり、外国につながりのある生徒を含め県内全域から生徒が集まっている。地域での唯一の定時制課程とあわせて、これらの機能は何らかの形で維持していく必要がある。
- 中学生は高校を選択する際に、自分が望む進路や内容を重視しており、通学時間はそれほど意識していないように感じている。また、四日市市や津市の工業科、商業科へ進学する生徒は、部活動に魅力を感じて進学する生徒も多い。当地域にどんな学びを残していくのかを精査した上で、中学校と高校が連携して、地元の高校の魅力をもっと中学生にPRしていく必要がある。
- 工業に限らず何かに特化した学びをつくり、その魅力を発信できれば、当地域の高校の魅力として定着していくのではないか。「当地域で実現したい学びや育みたい力」として示されている

「将来、地域産業を支える人材や地域で活躍する人材の育成」を可能にする環境づくりが必要であり、どこかに収束させるのではなく、生徒減の中で新しいものを生み出すという発想で考えるべきである。

- 地域外の高校へ進学している子どもの保護者から、通学時間や費用を考えると、鈴鹿市内に商業科や工業科があればよかったという声を聞く。子どもが減っていく中で新しいものをつくることは難しいことは理解しているが、子どもたちが中学校までの人間関係を大切にしながら地域の学校へ進学できる環境があつてほしい。
- アンケート結果でも、子どもたちが高校を選択する際に重視する点として、部活動があげられており、通学時間をかけてでもその学校に通いたいという生徒も多い。時間はかかるかもしれないが、当地域に魅力ある部活動をつくるのも高校活性化の1つの方策ではないか。
- これまで協議してきたように、今後も鈴鹿亀山地域の子どもたちに、多様で豊かな学びを提供することを第一の価値観に据えて検討していくことを、「学びと配置のあり方の方針」に明文化してはどうか。

【15年先の学びと配置のイメージについて】

- 中学校卒業者数が減少する中、県立高校の統合の必要性は理解しているが、地域外へ進学する生徒が多い当地域の状況への対応を講じたうえで、統合の議論をすべきではないか。
- 中学校卒業者数が減少する中で、いずれは現在の6校が統合していくのはやむを得ないが、15年後に2~3校になるという数字は、当地域の課題となっている流出入の現状を前提とした学級数の予測に基づくものであるため、あえて外に出す必要があるのか。学びの集約を図る中で、工業科を新たに設置するなど、当地域の県立高校の魅力を高めて、少しでも多くの子どもたちが地域に残るようにしていくことが大切である。
- 将來の学校数については大切な話であるので、まとめの文面に残した方がよい。ただし、15年先に鈴鹿市に2校、亀山市に1校という学校数の表記については、数字が独り歩きしないよう丁寧な説明を付け加えるべきである。
- 15年先に鈴鹿市内の県立高校は2校程度、令和10年度に石薬師高校募集停止という報道内容が独り歩きしたこと、石薬師高校の在校生や進学を希望していた子どもたちがショックを受けたり、次はどの高校がなくなるのかといった不安が保護者の間で広がったりしている。この協議会が当地域の県立高校を活性化し魅力を発信していくためのものであるならば、15年先に想定される学級数は明記しないほうがよいのではないか。
- 現在の進路状況をもとに想定した学級数は、今後変わりうるものであり、その数字が出てしまうのは怖い。地域外への流出を防ぎ、逆に他地域から集まるような新しい高校をつくりほしい。
- 地域の人手不足を解消するためにも、ぜひ工業科や商業科を設置してもらいたい。地域経済界としても、講師の派遣や設備の充実など何らかの支援をしていただきたい。
- 四日市市や津市の専門高校は、鈴鹿亀山地域の子どもたちを含め、広く地域経済を支える人材を育成する役割を果たしてきた。現状の中学生の進路状況を考えると、当地域に新たに工業科を設置するのは現実的ではない。
- アンケート結果を見ると、生徒は、主に通学のしやすさや学びたい学科やコースがあることを理由に高校を選択しているが、地域外の工業科や商業科へ進学しているのは、通学しやすいからではなく、地域内にこうした学科がないことが大きな理由であると考えている。それを県教育委員会が、通えるところに選択肢があるからよいというのであれば、地域別に活性化協議会を設置して議論する意義がなくなるのではないか。
- 当地域では、中学校卒業者数に対して県立高校の定員が少なく、地域外の高校へ進学している生徒が多い。中学校卒業者数の減少により学校数が減っていくのは致し方ないが、工業科の設置

などの対応をすることなく、現在の進路状況を前提として、鈴鹿市内の5校が15年先に2校になるというのは厳しすぎる。

- 中学校卒業者数が15年先に現在の6割程度となるのであれば、県立高校の定員も現在の6割の17学級程度となるのではないか。私立高校に流れることを想定して12~14学級としているのであれば納得できない。
- 県教育委員会は当地域に魅力ある高校をつくっていくという思いが足りないのではないか。例えば、飯野高校のように地域外からたくさんの生徒が集まる魅力的な高校をつくれば、想定される学級数が増えることもありうるのではないか。また、小中学校の学級編制標準が35人に変わってきており、15年先までには高校にも導入される可能性が高いことも考慮すれば、15年先に12~14学級で、鈴鹿市内に2校程度という数字も不確定要素が大きい。
- 15年先に鈴鹿市に2校程度となったときに、大学進学のニーズに対応する高校は6学級を下回らないという条件や、当地域の特色ある学科やコース、定時制課程などがどのようにしていくのか想像がつかない。選択肢が少なくなると、中学校における進路指導も難しくなる。
- 「15年先の学びと配置のイメージ」における学校数については幅を持たせた書き方とし、次年度以降も引き続き協議してはどうか。
- これまで協議した学びと配置のあり方を実現するうえで、地域の高校を2~3校とするのであれば、総合大学のように1つの高校で多様な学びの選択肢があり、希望する進路や適性に応じてフレキシブルに学べるような、県内のどこにもない夢のある新しい高校を当地域につくることができないか。学びの数だけ学校があるというのではなく、できるだけ大きな規模の高校で地域の子どもたちを全て受け入れ、多様性に対応していくという考え方を大切にしたい。
- 15年先に3校に集約する前提として、今ある学科の魅力をさらに高めたり、当地域の産業に特化した工業科を設置したりするなど、他地域への流出を防ぐ方策を考える必要がある。また、交通の便を考えると、将来的にはもう少し広いエリアで学びと配置のあり方を考えていってもよいのではないか。
- 仮に学校が集約されるとても、学力的に厳しい子どもなど、多様な子どもたちが迷わず選択できるような教育環境を維持してほしい。
- 15年後も、外国につながりのある子どもや特別な支援を必要とする子どもなど多様な子どもたちが、高校卒業後の進路も含めて、安心して学べる教育環境を実現していくというイメージを打ち出す必要がある。例えば、1つの学校の中で、全日制に入学したとしても、状況に応じて定時制や通信制に切り替えることができるような、新しい発想の学校をつくることはできないか。
- 子どもの数は決まっているので、地域間で取り合うことによって共倒れになってはいけないと思うが、せっかく鈴鹿亀山地域で協議をしているので、当地域に新しい校舎、新しい学科をつくり多様な選択肢を保障し、子どもたちにとって魅力的な高校をつくりたい。
- 生徒は市町の枠を越えて希望する高校や就職先を選択している。今後想定される学級数など、具体的な数字を示すことにより議論を進め、他地域よりも早く魅力的な再編の方向性を示したほうが、当地域に生徒が集まるのではないか。
- 15年先の県立高校のイメージが、マイナスとなってはいけない。当協議会のまとめとしては、地域の高校の活性化に向けた気運を盛り上げていく、というメッセージとする必要があるのでないか。
- 「15年先の学びと配置のイメージ」については、数字を前面に出さずに「学びと配置のありの方針」に基づいて、具体的にどのような高校づくりをめざすのかを前向きに表現してもらいたい。
- 「学びと配置のありの方針」の筆頭に、県立高校の活性化については子どもたちを第一に考えて検討することが書き加えられたことはよかったです。

- 生徒数の減少により学びを集約する必要があることは理解するが、新しい選択肢を設けるという趣旨の文言も加えてもらいたい。
- 「集約」は現状のものを1つにまとめる印象が強いため、「再編」あるいは「再構成」としたほうがよいのではないか。
- 学級数が減少していく中で、通信制高校のニーズの高まりや専門性の高い教員の人材確保など様々な課題はあるが、協議会として、子どもたちの多様なニーズに応えていくという観点は大切にしたい。
- 子どもたちが自分の進路についてしっかりと考え方を選択していくよう、多様な学科やコースを残しつつ高校の活性化につなげてほしい。
- 多様な学びを保障するため、一定の学校規模を維持しつつ、学校を新設したり再編したりすることで、前向きに学校をつくっていくというイメージで協議を進めたい。
- 前回と比べて「学びと配置のイメージ」の表現が非常に前向きな方向に修正されたと感じる。今後もこのような前向きな情報発信に努めてほしい。
- 15年先に見込まれる12~14学級という数字について、どのような根拠に基づく想定なのかをまとめにも記載してもらいたい。
- 例えば伊賀白鳳高校のような総合専門高校を当地域にもつくるといった具体的なイメージが示されれば、子どもたちがより地元の高校に進学し、地域の活性化にもつながる。

【令和10年度までに想定される学級減に対する具体的な対応について】

- 稲生高校では、入学後に自分の興味関心に応じて6つのコースを選択している。「工業等の学びについては、今ある学びを充実させる」とあるが、そうすることで今ある学びの選択肢が失われることのないよう、留意して進めてほしい。
- 工業等の学びについて、稻生高校のコースの充実を想定しているのであれば、普通科の単位数が減ったとしても、できるだけ専門科の単位数を増やすことで、充実を図ってほしい。
- 石薬師高校の募集停止というマイナスな話題がいきなり出てしまったと感じており、情報発信の仕方については、十分配慮してもらいたい。
- 石薬師高校が募集停止となった場合、石薬師高校への進学を希望する子どもたちの代わりとなる進学先があるのか心配である。
- 石薬師高校については、一気に募集停止とするのではなく1学級でも残してほしい。募集停止となっても、地域の中学校卒業者数に見合うだけの定員を置くから大丈夫というのではなく、石薬師高校での学びに魅力を感じて進学を希望する子どもたちの受け皿がほしいという、保護者の思いを理解してほしい。
- 亀山市からは、伊賀市のあけぼの学園高校や石薬師高校へ一定数の生徒が進学している。両校とも令和10年度に募集停止する案が示されているが、再編するのであれば、同校を希望していた子どもたちの進学先を保障するという意識は、必ず持ってほしい。
- 石薬師高校の募集停止案は寂しいが、15年先を見据えて、スケールメリットを大切にしながら、多様性を受け止めることができる高校をつくっていくという方向性を打ち出したほうが、高校の職員も迷いなく前向きに魅力化に取り組むことができる。
- 石薬師高校が募集停止となったとしても、石薬師高校への進学を希望していた子どもたちを含めて、地域の県立高校がしっかりと受け入れ、幅広い学力層の多様な生徒に対応していくこと、地域の県立高校の校長で共有している。
- 石薬師高校を募集停止とする場合、特別支援学校の校舎として活用していくことについても記載したほうがよいのではないか。また、石薬師高校を希望していた生徒のニーズにどう応えていくのかについてもある程度記載しないと説明不足ではないか。

- 石薬師高校が有していた機能は同じ鈴鹿亀山地域の高校全体で引き継ぎ、幅広い学力層の多様な生徒への対応を進めていこうと、当地域の県立高校の校長で共有している。
- 亀山市からは、石薬師高校やあけぼの学園高校へ一定数の生徒が進学しているが、「多様な子どもたちが一人ひとりの状況に応じて、安心して学べる教育環境をどの学校においても充実させる。」とあることから、この趣旨に沿ってしっかり対応してもらえるものと捉えている。
- 子どもたちや保護者の不安を払拭するため、今回の再編について丁寧に説明してほしい。
- 昭和40年代後半から50年代の生徒急増期にいくつかの普通科高校が新設された経緯を考えれば、生徒減の中にあっては普通科を学級減しながら学びの選択肢を維持していくのが現実的ではないか。
- 募集停止となった場合に、その高校の特色ある部活動やそのための施設がどうなっていくかも関心事となっている。

【今後の協議について】

- 当協議会は活性化を推進するための協議会なので、今後の協議にも、ぜひ「活性化」の文言を入れて、できるかどうかは別として学校の新設や総合学科の設置など、新しい議論にもつなげてほしい。
- 次年度以降は学校をどう閉じるかではなく、市と県が連携して中高一貫校を設置するなど、高校の活性化につながる夢のある協議ができるようにしてほしい。
- 例えば、県内唯一の学科である稻生高校の体育科を三重交通Gスポーツの杜・鈴鹿の敷地内へ移転し、施設を自由に活用できるようにするなど、夢のある議論も進めてほしい。
- 新たに工業高校や工業科を設置するのであれば、四日市市や津市にも工業高校がある中で、工業分野を総合的に扱う学科とするのか、地域産業に特化した学科とするのかなど、どのような特色を持たせるのかを考えていく必要がある。
- その時その時の子どもたちにとって魅力ある高校となるよう、多様な選択肢を持つ夢のある学校をつくってほしい。
- 令和13年度以降に大きな生徒減が見込まれているのであれば、少しでも早く協議を進めていく必要がある。また、一旦高校に入学しても、自分に合わなかったり、壁にぶつかったりしたときに多様な選択ができる高校をつくってほしい。
- 通信制課程のニーズの高まりから、県立高校でも全日制から通信制へ柔軟に移ることができる学校があってもよい。
- 校舎の老朽化が進んでいることから、高校再編と併せて学校施設をどうしていくかについても協議を進めていく必要がある。
- 校舎の建替えは学校の機能をふまえたものとする必要があり、他地域に先駆けてその方向性を示すことが子どもたちや保護者の安心につながるのではないか。次年度以降、「早急に検討を進める」といった文言を加えてほしい。
- 校舎の新築や建替えには時間を要することから、子どもが減少していく中で、当地域の高校の魅力をいかに高め子どもたちに選んでもらうかについて、今年度の流れを引き継ぎつつ、より議論を進める必要がある。

5 今後の鈴鹿亀山地域における県立高等学校の学びと配置のあり方について（当協議会のまとめ）

(1) 学びと配置のあり方の方針

- 当地域の子どもたちに多様で豊かな学びを提供することを第一の価値観に据えて検討する。
- 今後の学級減への対応については、15年先までの中学校卒業者数の減少をふまえたものとする。
- 今ある学びをそのまま残すのではなく、よりよい形で充実させるという発想を大切にする。
- 校舎の新築や建替えも視野に入れ、地域の子どもたちが地域で学べる環境や、他地域から子どもが集まるような新しい学校をつくるという方向で検討する。
- 当地域には職業系専門学科が少ないことから、普通科のコースを含め、専門性の高い学びや多様な学びの選択肢の維持・充実を図る。
- 大学進学のニーズに応える高校が地域には必要であり、できるだけ規模を維持し、充実を図る。
具体的には、1学年あたり8学級あることが望ましく、また、地域全体の学級数が減少する中、やむを得ず学校規模を縮小する場合も、1学年6学級を下回らないようにすることが望ましい。
- 部活動の活性化や学校行事の充実のためには、一定の学校規模があることが望ましく、部活動の活性化のためには、1学年あたり4学級以上あることが望ましい。
- 外国につながりのある生徒や特別な支援を必要とする生徒、不登校を経験した生徒など、多様な生徒が安心して学べる教育環境を実現する。
- 多様なニーズに対応するため、全日制課程だけでなく、定時制や通信制課程のあり方も含めて検討する。
- 通学方法や通学時間など、通学に係る状況を考慮する。通学時間については概ね90分以内、できれば60分以内となることが望ましい。

(2) 15年先（令和22年度）の学びと配置のイメージ

- 当地域の中学校卒業者数は、令和22年3月には、令和7年3月の2,268人と比較して約6割となる1,400人にまで減少することが見込まれる。当地域の県立高校（全日制）の総学級数は、中学生の進路状況が現在と大きく変わらなければ、1学年あたり12～14学級程度となることも想定される。
- こうした中、「学びと配置のあり方の方針」をふまえ、校舎の新築や建替えを含めて検討しつつ、一定の学校規模を保ちながら現在の6校を再編し、子どもたちの豊かな教育環境を実現していく必要がある。
- 亀山市内の1校は、当地域内の通学環境を考慮し、周辺地域のニーズに応える高校として存続させる。
- 鈴鹿市内の5校は、大学進学のニーズに応える観点と、他地域にはない特色のある学びや工業をはじめとする専門性の高い学びなど多様な学びの選択肢を提供する観点を重視しながら、学びと機能を再編する。
- 全日制課程だけでなく、定時制や通信制課程のあり方も含めて検討することで、多様な学びの形態の実現をめざす。

(3) 15年先（令和22年度）を見据えた令和10年度までに想定される3学級減への具体的対応

- 大学進学のニーズに応えるため、多様な選択科目の開設や専門性の高い教員配置ができる高校を、地域に1校は配置する。
- 専門学科や専門性の高い普通科のコースなど、多様な学びの選択肢をできるだけ維持する。
- 学校行事や部活動など、子どもたちが協働的に活動できる環境を提供できるよう、可能な限り一定の学校規模を維持する。
- 工業等の学びについては、今ある学びを充実させる。
- 多様な子どもたちが一人ひとりの状況に応じて安心して学べる教育環境を、すべての学校において充実させる。
- こうした教育環境を実現するため、令和10年度入学者選抜（令和9年度実施）から石薬師高校を募集停止とし、当地域の全日制課程6校28学級を5校25学級へと再編し、各県立高校の特色化・魅力化を図る。

(4) 今後の協議について

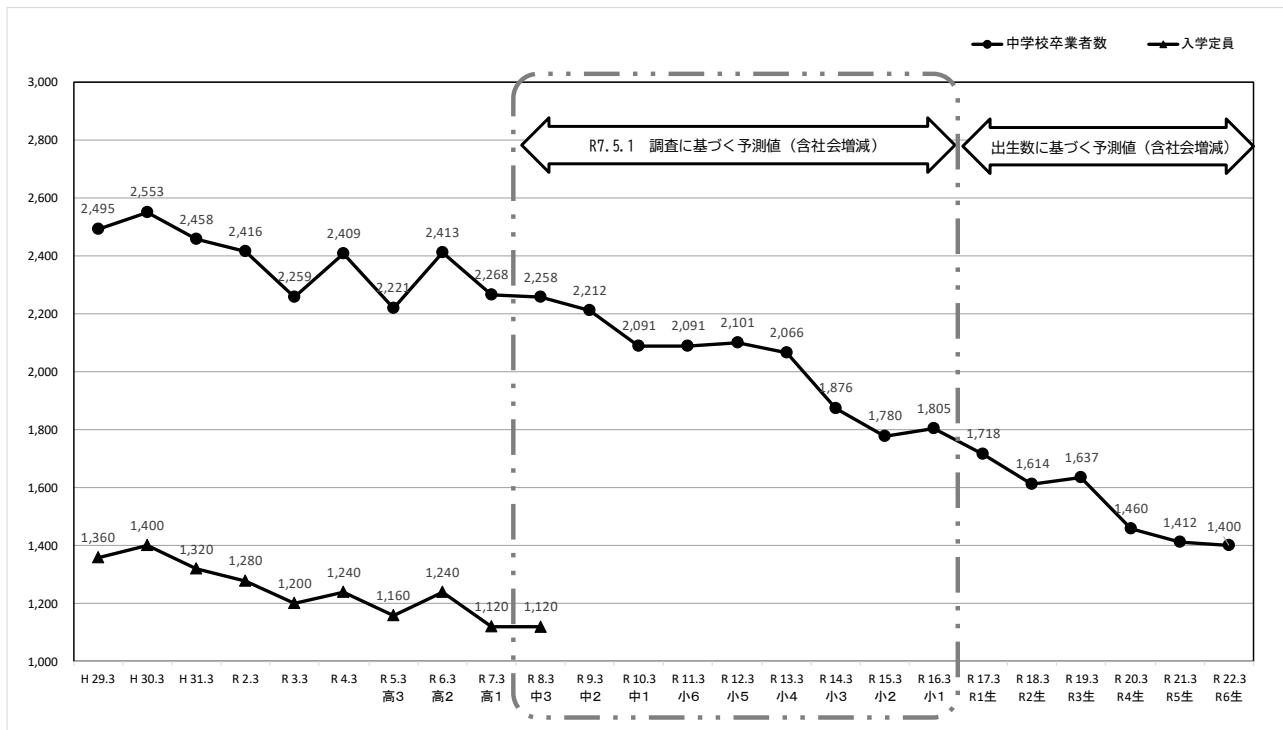
- 令和10年度以降も中学校卒業者数の急速な減少が進む中、その過程における学級減への対応については、当地域の県立高校の将来像を検討しつつ、15年先における状況を想定しながら、引き続き県立高校の活性化に向けた協議を進める必要がある。
- 特に令和13～15年度に大きな生徒減が見込まれる。この期間に想定される5～7学級程度の学級減への対応については、できるだけ早期に協議を進め、遅くともその3年前である令和10年度までに当協議会としての考え方をとりまとめる必要がある。
- これまでの協議をふまえ、以下の点に留意しながら協議を進める必要がある。
 - ・ 隣接地域の活性化協議会における検討状況について
 - ・ 大学進学のニーズや専門性の高い学びを含む多様な学びの選択肢の提供について
 - ・ 地域からのニーズが高い工業等に関する専門性の高い学びの提供方策について
 - ・ 定時制や通信制課程も含めた多様な子どもたちが学べる環境の保障について
 - ・ 老朽化にともなう校舎の新築や建替えについて

【参考資料：令和7年度鈴鹿亀山地域高等学校活性化推進協議会資料より抜粋】

○ 鈴鹿亀山地域の中学校卒業者数の推移と予測（含む社会増減）

		R 4.3 卒業	R 5.3 卒業	R 6.3 卒業	R 7.3 卒業	R 8.3 現中3	R 9.3 現中2	R 10.3 現中1	R 11.3 現小6	R 12.3 現小5	R 13.3 現小4	R 14.3 現小3	R 15.3 現小2	R 16.3 現小1
鈴鹿市	卒業者数	1,988	1,798	1,973	1,808	1,775	1,777	1,639	1,667	1,651	1,636	1,471	1,400	1,395
	前年度対比		-190	175	-165	-33	2	-138	28	-16	-15	-165	-71	-5
	R7.3対比					-33	-31	-169	-141	-157	-172	-337	-408	-413
亀山市	卒業者数	421	423	440	460	483	435	452	424	450	430	405	380	410
	前年度対比		2	17	20	23	-48	17	-28	26	-20	-25	-25	30
	R7.3対比					23	-25	-8	-36	-10	-30	-55	-80	-50
小計	卒業者数	2,409	2,221	2,413	2,268	2,258	2,212	2,091	2,091	2,101	2,066	1,876	1,780	1,805
	前年度対比		-188	192	-145	-10	-46	-121	0	10	-35	-190	-96	25
	R7.3対比					-10	-56	-177	-177	-167	-202	-392	-488	-463
県内合計	卒業者数	16,244	16,055	15,891	15,718	15,517	15,261	14,807	14,345	14,044	14,030	13,399	12,753	12,408
	前年度対比		-189	-164	-173	-201	-256	-454	-462	-301	-14	-631	-646	-345
	R7.3対比					-201	-457	-911	-1,373	-1,674	-1,688	-2,319	-2,965	-3,310

○ 鈴鹿亀山地域中学校卒業者数と県立高等学校（全日制）入学定員の推移と予測



○ 鈴鹿亀山地域の中学校卒業者進路先の推移

鈴鹿亀山地域の状況

卒業年度	卒業者数	鈴鹿亀山地域（全日制）										合計	地域外（全日制）				定時制・通信制			その他	
		県立						私立・高専		県立			県内		県外						
		神戸	飯野	白子	石薬師	稻生	亀山	計	鈴鹿	鈴鹿高専	四日市地域	津地域	その他地域	私立・高専	定時制	通信制	通信制				
2市の合計	R7.3卒	2,268	195	64	142	72	128	160	761	277	60	1,098	375	299	54	119	40	69	78	70	66
		100%	8.6%	2.8%	6.3%	3.2%	5.6%	7.1%	33.6%	12.2%	2.6%	48.4%	16.5%	13.2%	2.4%	5.2%	1.8%	3.0%	3.4%	3.1%	2.9%
	R6.3卒	2,413	235	66	160	100	130	153	844	339	49	1,232	325	338	46	147	36	64	95	68	62
		100%	9.7%	2.7%	6.6%	4.1%	5.4%	6.3%	35.0%	14.0%	2.0%	51.1%	13.5%	14.0%	1.9%	6.1%	1.5%	2.7%	3.9%	2.8%	2.6%
	R5.3卒	2,221	202	72	128	83	129	166	780	290	49	1,119	323	315	40	152	29	47	80	56	60
		100%	9.1%	3.2%	5.8%	3.7%	5.8%	7.5%	35.1%	13.1%	2.2%	50.4%	14.5%	14.2%	1.8%	6.8%	1.3%	2.1%	3.6%	2.5%	2.7%
	R4.3卒	2,409	229	73	141	83	145	167	838	299	54	1,191	355	344	52	167	43	57	73	72	55
		100%	9.5%	3.0%	5.9%	3.4%	6.0%	6.9%	34.8%	12.4%	2.2%	49.4%	14.7%	14.3%	2.2%	6.9%	1.8%	2.4%	3.0%	3.0%	2.3%

市別の状況

卒業年度	卒業者数	鈴鹿亀山地域（全日制）										合計	地域外（全日制）				定時制・通信制			その他	
		県立						私立・高専		県立			県内		県外						
		神戸	飯野	白子	石薬師	稻生	亀山	計	鈴鹿	鈴鹿高専	四日市地域	津地域	その他地域	私立・高専	定時制	通信制	通信制				
鈴鹿市	R7.3卒	1,808	180	53	141	57	115	67	613	245	54	912	314	209	26	91	29	59	60	54	54
		1,973	217	58	160	80	122	69	706	304	41	1,051	265	255	30	115	29	50	73	56	49
	R6.3卒	1,798	180	62	126	66	113	81	628	259	43	930	271	237	26	121	24	37	64	45	43
		1,988	203	61	139	66	134	72	675	275	46	996	318	276	34	126	39	45	56	53	45
	R5.3卒	460	15	11	1	15	13	93	148	32	6	186	61	90	28	28	11	10	18	16	12
		440	18	8	0	20	8	84	138	35	8	181	60	83	16	32	7	14	22	12	13
	R4.3卒	423	22	10	2	17	16	85	152	31	6	189	52	78	14	31	5	10	16	11	17
		421	26	12	2	17	11	95	163	24	8	195	37	68	18	41	4	12	17	19	10

○ 鈴鹿亀山地域の県立高等学校等の学科とコースについて（令和8年度入学生）

	学校名	大学科※	入学定員	1	2	3	4	5	6	7	8						
全日制課程	県立	神戸	普通科	280	【普通科】 ※2年生から文系・理系の類型に分かれる						【理科教】						
		飯野	普通科	160	【応用デザイン科】 ビジュアルデザインコース 服飾デザインコース 美術コース		【英語コミュニケーション科】 A（英語基礎力強化） B（ハイレベルな英語活動）		【文化教養（吹奏楽）コース】 【生活創造科】 食彩コース 服飾コース			全28学級 普通科※ 24 専門学科 4 (家庭2) (情報2) 総合学科 0					
		白子	普通科 専門学科	240	【普通科】 スタンダード類型 アカデミック類型		【体育科】		【システムメディア科】 ITシステム系列 メディア・マネジメント系列 情報ビジネス系			普通科（特進コース・探究コース・総合コース） ※募集定員には中等教育学校後期課程（医進・選抜コース/特進コース）も含む					
		石薬師	普通科	80	【普通科】 自動車工業コース・情報コース 自動車工業コース・ビジネスコース・介護福祉コース		【体育科】		【総合生活科】 食物文化系列 人間福祉系列 幼児教育系列								
		稻生	普通科	160	【普通科】 ドッグケアコース、パソコンコース、日本語コース、土日コース、平日サポートコース		【体育科】		【総合生活科】 食物文化系列 人間福祉系列 幼児教育系列								
		亀山	普通科 専門学科	200	【普通科】 ドッグケア系 セレクション系		【システムメディア科】 ITシステム系 メディア・マネジメント系 情報ビジネス系		【総合生活科】 食物文化系 人間福祉系 幼児教育系								
	私立	鈴鹿	普通科	470	470	普通科（特進コース・探究コース・総合コース） ※募集定員には中等教育学校後期課程（医進・選抜コース/特進コース）も含む											

○ 定時制課程 県立 飯野 80
 ○ 通信制課程 私立 徳風 240
 ○ 高等専門学校 国立 鈴鹿工業高等専門学校 200
 普通科
 普通科（総合コース、ドッグケアコース、パソコンコース、日本語コース、土日コース、平日サポートコース） ※技能連携あり
 機械工学科（40）、電気電子工学科（40）、電子情報工学科（40）、生物応用化学科（40）、材料工学科（40）

※大学科の「普通科」には、普通科系専門学科を含む

○ 鈴鹿亀山地域の県立高等学校（全日制）卒業生の進路状況

【令和7年3月卒】

学校名	学科	四年制大学	短大	専門学校等	就職	その他	卒業者数
神戸	普通	282	7	8	1	16	314
	理数	89.8%	2.2%	2.5%	0.3%	5.1%	100.0%
飯野	応用デザイン	39	5	32	43	25	144
	英語コミュニケーション	27.1%	3.5%	22.2%	29.9%	17.4%	100.0%
白子	普通	58	16	49	51	3	177
	文化教養	32.8%	9.0%	27.7%	28.8%	1.7%	100.0%
	生活創造	0	0	11	23	1	35
石薬師	普通	7	2	14	72	2	97
稻生	普通	18	6	32	96	2	154
	体育	11.7%	3.9%	20.8%	62.3%	1.3%	100.0%
亀山	普通	25	8	26	17	0	76
	システムメディア	19	13	28	49	7	116
	総合生活	16.4%	11.2%	24.1%	42.2%	6.0%	100.0%
普通科計 (普通科系専門学科を含む)		429	44	161	280	48	962
		44.6%	4.6%	16.7%	29.1%	5.0%	100.0%
専門学科計		19	13	39	72	8	151
		12.6%	8.6%	25.8%	47.7%	5.3%	100.0%
総合学科計		0	0	0	0	0	0
		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
合計		448	57	200	352	56	1,113
		40.3%	5.1%	18.0%	31.6%	5.0%	100.0%

○ 鈴鹿亀山地域の県立高校に関するアンケート結果について

1 生徒を対象としたアンケート結果

(1) 高校選びで重視すること（問6）

「学校の雰囲気・イメージ」(53.1%)、「通学のしやすさ・距離」(50.5%)に続いて、「文化祭や体育祭などの学校行事が充実している」(47.6%)、「学びたい学科やコースがある」(39.1%)、「自分の興味関心に応じて多様な学びが選択できる」(38.8%)の順となっている。

(2) 高校に期待する教育（問8）

高等学校には、「自ら学び続ける力が身につく教育」(52.0%)、「基本的な知識が身につく教育」(48.0%)をはじめ、「社会人として必要なマナー・礼儀・責任感が身につく教育」(46.9%)、「社会性や協調性、コミュニケーション能力など協働する力が身につく教育」(42.0%)を期待している。

(3) 希望する学級数について（問10）

多い順に「4～6学級」(47.9%)、「2～3学級」(32.3%)、「1学級」(13.4%)、続いて「7学級以上」(6.4%)となっている。

(4) 通学時間について（問11）

多い順に「60分以内まで」(54.0%)、「30分以内まで」(22.5%)、「90分以内まで」(16.8%)、「120分以内まで」(3.5%)、「121分以上」(3.2%)となっている。

(5) 将来生活する場所について（問12）

「まだ決まっていない、わからない」(40.4%)が最も多く、続いて、「県外」(20.0%)、「一度は地元を離れても、いつかは戻りたい」(13.5%)、「地元」(12.3%)となっている。

2 保護者を対象としたアンケート結果

(1) 高校選びで重視すること（問6）

「学びたい学科やコースがあること」(69.6%)に続いて、「通学のしやすさ・距離」(69.3%)、「自分の興味関心に応じて多様な学びが選択できること」(58.7%)に続いて、「学校の雰囲気・イメージ」(41.8%)となっている。

(2) 高校に期待する教育（問8）

「自ら学び続ける力が身につく教育」と「社会性や協調性、コミュニケーション能力など協働する力が身につく教育」(58.5%)をはじめ、「自分で問い合わせや課題を見つけ、主体的に取り組む力が身につく教育」(50.4%)、「多様な選択肢の中から進路を決定する力が身につく教育」(49.6%)を期待している。

(3) 学級の規模について（問10）

多い順に「4～6学級」(53.7%)、「2～3学級」(28.2%)、「1学級」(11.3%)、続いて「7学級以上」(6.8%)となっている。

(4) 通学時間について（問11）

多い順に「60分以内まで」(70.7%)、「30分以内まで」(19.2%)、「90分以内まで」(9.0%)、「120分以内まで」(1.1%)、「121分以上」(0.1%)となっている。

(5) 将来生活する場所について（問12）

「本人の希望次第」(72.4%)が最も多く、続いて、「地元」(10.3%)、「一度は地元を離れても、いつかは戻ってほしい」(5.0%)、「特に考えはない」(3.3%)となっている。

(6) 今後の鈴鹿亀山地域の県立高校のあり方について

今後の鈴鹿亀山地域の高校については、「一定の統合は避けられない」(71.8%)が最も多く、続いて「統合は避けるべき」(22.3%)、「積極的に統合を進めるべき」(5.9%)となっている。

○ 学級規模と教育環境

1 教員数

(1) 教職員定数

各学校に配置される教職員定数の標準は、法律により、入学定員（÷学級数）に応じて定められています。

全日制普通科の場合

1学年あたりの学級数	1学級	2学級	3学級	4学級	5学級	6学級	7学級	8学級
教員数(人)	8	15	23	29	35	43	48	52
差		7	8	6	6	8	5	4

※ 校長、教頭、養護教諭、実習助手、事務職員を除く

※ 上記以外に学科による加算や加配教員、非常勤講師等の配置があります

※ あくまで標準であり、すべての学校がこの人数に一致するわけではありません

(2) 学級数別の各教科担当教員の配置シミュレーション（全日制普通科）

1学年あたりの学級数	1学級	2学級	3学級	4学級	5学級	6学級	7学級	8学級
計	8	15	23	29	35	43	48	52
国語	1	2	4	5	5	7	7	8
数学	2	3	4	5	6	7	8	9
英語	2	3	4	5	6	7	8	9
社会	1	2	3	4	5	6	6	7
理科	1	2	3	4	5	6	7	8
保体	1	2	3	3	4	5	6	6
芸術	0	1	1	1	2	3	3	3
家庭	0	0	1	1	1	1	1	1
情報	0	0	0	1	1	1	1	1

※ 1～7学級の教科別教員数については、県内の8学級の高校の教科別教員数を参考に算出

※ 国語・数学・英語は学年あたりの配置人数が1、2、3人で色分け

※ 社会は地歴科と公民科から構成しており、地歴科では日本史、世界史、地理を専門とする教員

を5人、公民科では1人を配置できる6人と、地歴3人、公民1人を配置できる4人で色分け

※ 理科は物理、化学、生物を専門とする教員が2人ずつ配置できる6人と、1人ずつの3人で色分け

※ 保健体育は学年あたりの人数が2人、1人で色分け

※ 芸術は音楽、美術、書道の教員が1人ずつ配置できる3人で色分け

※ この表はシミュレーションであり、実際は学校ごとに教育課程などが異なるため、教員数の合計、教科別の人�数ともこのとおりとは限りません。

2 部活動

R4学校規模別部活動設置状況（男子）マネージャー含む

第1学年学級数			1	2	3	4	5	6	7	8
学校数			2	7	2	9	12	7	8	7
No	競技・種目	設置 学校数	設置 割合	登録 人数						
1	硬式野球	53	98.1%	1,393	2	7	2	8	12	7
2	バスケットボール	47	87.0%	918	1	6	2	8	10	5
3	陸上競技	46	85.2%	824	2	4	2	7	10	6
4	卓球	42	77.8%	682	1	4	2	5	10	5
5	バドミントン	41	75.9%	1,130	0	6	0	6	11	4
6	サッカー	39	72.2%	1,515	0	2	2	5	10	5
7	テニス	34	63.0%	513	0	2	2	4	8	4
8	バレーボール	33	61.1%	627	1	2	0	5	7	4
9	ソフトテニス	31	57.4%	518	1	4	0	6	5	4
10	剣道	27	50.0%	177	0	0	1	4	5	5
11	ハンドボール	20	37.0%	472	0	0	0	1	4	4
12	柔道	20	37.0%	146	1	1	0	2	8	1
13	弓道	19	35.2%	348	0	0	1	4	5	3
14	山岳（ワンド・フォード・ル）	12	22.2%	148	0	0	0	2	1	2
15	ラグビー	10	18.5%	207	0	0	0	1	3	1
16	水泳	10	18.5%	87	0	0	0	3	1	0
17	ダンス	9	16.7%	39	0	0	0	0	4	1
18	レスリング	7	13.0%	53	0	1	0	1	4	0
19	軟式野球	6	11.1%	104	0	0	0	0	1	1
20										
設置部活動の種類（～No.19）			7	11	8	18	19	17	19	18
設置部活動の全種類			7	15	9	22	28	23	26	22

R4学校規模別部活動設置状況（文化部）

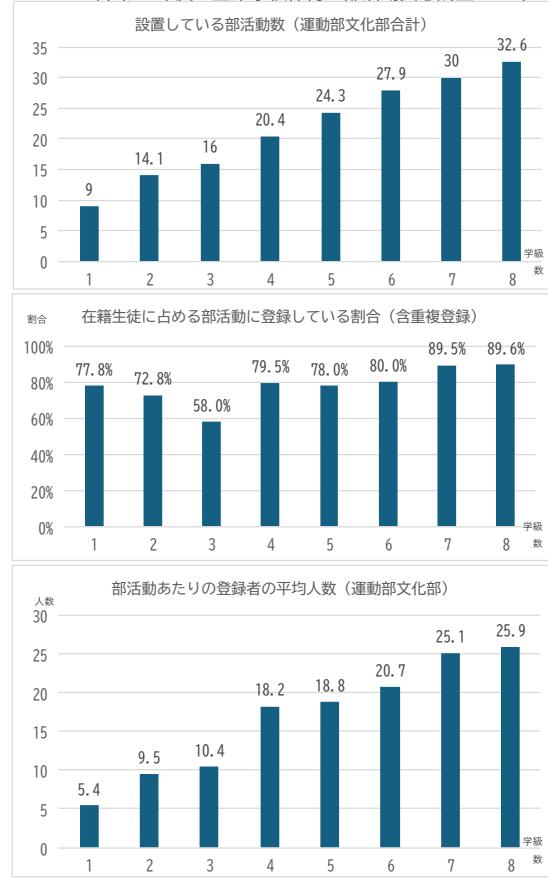
第1学年学級数			1	2	3	4	5	6	7	8
学校数			2	7	2	9	12	7	8	7
No	競技・種目	設置 学校数	設置 割合	登録 人数						
1	美術	47	87.0%	634	0	5	2	8	10	7
2	吹奏楽	44	81.5%	1,347	1	2	1	8	11	6
3	茶道	38	70.4%	536	1	4	2	5	8	5
4	書道	36	66.7%	351	0	2	2	5	9	5
5	放送	31	57.4%	308	0	1	0	4	9	5
6	写真	24	44.4%	586	0	2	0	4	6	4
7	家庭	19	35.2%	310	2	3	2	3	3	2
8	演劇	19	35.2%	214	0	0	0	2	5	3
9	ボランティア	13	24.1%	205	0	3	1	1	3	3
10	華道	13	24.1%	136	0	1	1	2	4	3
11	コンピュータ	11	20.4%	147	1	1	0	1	3	2
12	文芸	11	20.4%	106	0	1	0	0	0	2
13	アニメ・漫画	10	18.5%	197	0	1	0	0	3	2
14	人権サークル	10	18.5%	44	0	0	1	2	3	2
15	調理	9	16.7%	236	0	0	0	1	2	1
16	英語	9	16.7%	101	0	2	0	1	2	0
17	合唱	9	16.7%	64	0	0	0	1	2	1
18	新聞	8	14.8%	67	0	0	0	0	3	2
19	邦楽	7	13.0%	91	0	1	0	0	1	0
20	自然科学	7	13.0%	47	0	0	0	1	1	0
設置部活動の種類（～No.20）			4	14	8	16	19	17	19	18
設置部活動の全種類			4	19	9	30	37	33	32	31

R4学校規模別部活動設置状況（女子）マネージャー含む

第1学年学級数			1	2	3	4	5	6	7	8
学校数			2	7	2	9	12	7	8	7
No	競技・種目	設置 学校数	設置 割合	登録 人数						
1	陸上競技	41	75.9%	486	1	3	1	6	9	6
2	バドミントン	39	72.2%	913	0	5	0	7	10	4
3	バスケットボール	39	72.2%	575	2	2	0	5	10	6
4	卓球	37	68.5%	334	0	1	2	5	8	6
5	バレーボール	34	63.0%	533	1	1	0	5	7	7
6	テニス	29	53.7%	316	0	1	1	3	5	6
7	ソフトテニス	28	51.9%	279	1	3	0	5	5	4
8	剣道	25	46.3%	135	0	0	1	2	4	5
9	弓道	17	31.5%	334	0	0	1	3	5	2
10	ハンドボール	15	27.8%	255	0	0	0	0	3	4
11	ダンス	12	22.2%	403	0	0	0	0	5	1
12	ソフトボール	12	22.2%	188	0	0	0	2	3	2
13	柔道	12	22.2%	38	0	0	0	1	4	2
14	水泳	10	18.5%	54	0	0	0	3	0	1
15	硬式野球	9	16.7%	24	0	1	0	1	3	0
16	サッカー	7	13.0%	93	0	1	0	0	2	0
17	体操	5	9.3%	66	0	0	0	1	1	0
18	空手道	5	9.3%	57	0	0	0	0	0	1
19	山岳（ワンド・フォード・ル）	5	9.3%	31	0	0	0	1	1	0
20										
設置部活動の種類（～No.19）			4	9	5	15	17	16	17	19
設置部活動の全種類			4	11	6	17	25	21	25	21

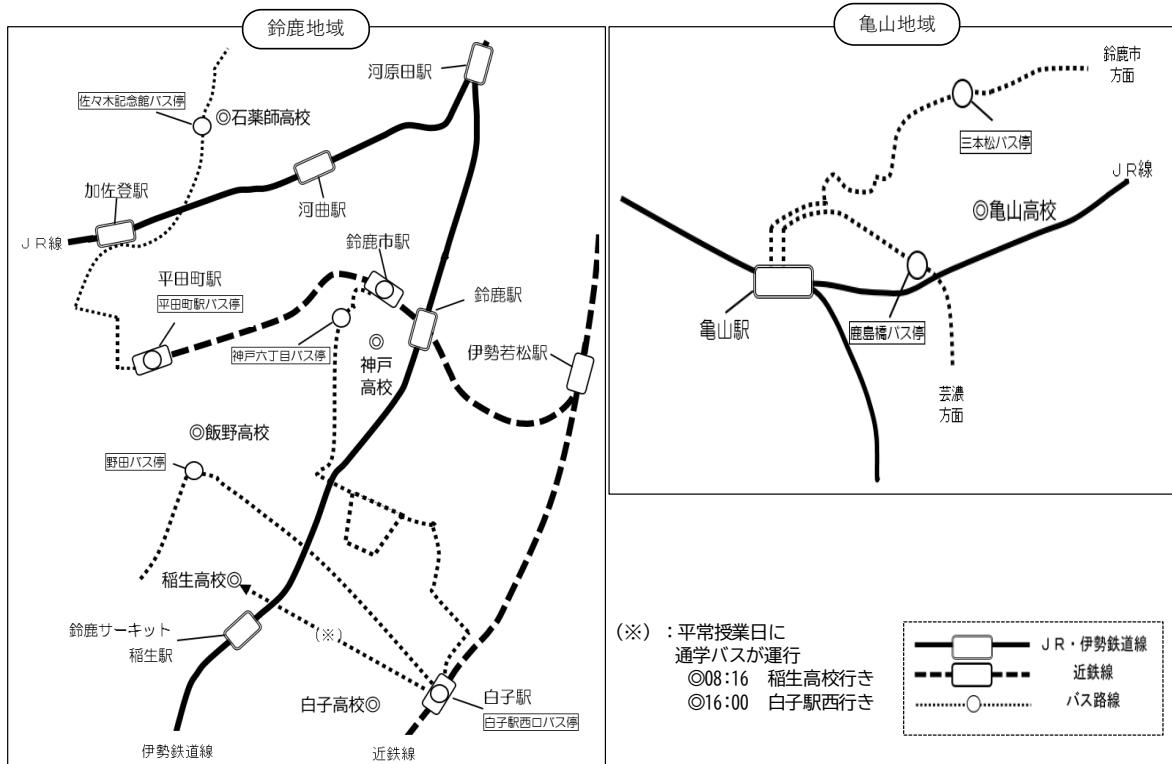
○1学年あたりの学級数別の部活動の状況

(令和4年度三重県学校体育・部活動実態調査より)



○ 鈴鹿亀山地域の県立高等学校（全日制）への交通手段等

(1) 通学における主な路線図



(2) 通学方法別生徒数と割合

R 7. 5. 1 学校基本調査より

通学方法\学校名	神戸	飯野	白子	石薬師	稻生	亀山	合計
徒歩のみ	13	39	18	10	8	24	112
	1.5%	8.5%	2.5%	3.5%	1.7%	4.1%	3.3%
自転車のみ	445	109	270	159	305	294	1,582
	51.0%	23.9%	36.9%	56.0%	66.2%	50.3%	46.7%
単車のみ	3	0	0	0	0	0	3
	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
JRのみ	14	13	3	22	27	67	146
	1.6%	2.8%	0.4%	7.7%	5.9%	11.5%	4.3%
私鉄のみ	164	117	227	0	5	1	514
	18.8%	25.6%	31.1%	0.0%	1.1%	0.2%	15.2%
バスのみ	21	22	6	13	0	27	89
	2.4%	4.8%	0.8%	4.6%	0.0%	4.6%	2.6%
JRと私鉄	7	8	9	1	3	8	36
	0.8%	1.8%	1.2%	0.4%	0.7%	1.4%	1.1%
	2	21	0	1	2	11	37
JRと自転車	50	7	2	39	36	102	236
	5.7%	1.5%	0.3%	13.7%	7.8%	17.5%	7.0%
	20	34	20	7	2	0	83
私鉄とバス	1	0	0	0	0	0	1
	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	119	65	157	8	48	1	398
私鉄と自転車	2	7	4	11	5	23	52
	0.2%	1.5%	0.5%	3.9%	1.1%	3.9%	1.5%
	11	15	15	13	20	26	100
その他 (車送迎、3つ以上の交通機関等)	1.3%	3.3%	2.1%	4.6%	4.3%	4.5%	3.0%
合計	872	457	731	284	461	584	3,389

令和7年度 鈴鹿亀山地域高等学校活性化推進協議会 委員

No	区分	所属等	名前
1	学識経験者	三重大学教育学部 准教授	市川 俊輔
2	地域有識者	鈴鹿商工会議所 相談役	内藤 俊樹
3		亀山商工会議所 参与	山本 安夫
4	市町教育委員会 教育長	鈴鹿市教育委員会 教育長	廣田 隆延
5		亀山市教育委員会 教育長	中原 博
6	県立高等学校長代表	県立白子高等学校 校長	水谷 正樹
7	小中学校長代表	鈴鹿市立平田野中学校 校長	辻井 康博
8	小中学校PTA代表	鈴鹿市PTA連合会 代表 (鈴鹿市立白子中学校PTA会長)	村田 多恵子
9		亀山市PTA連合会 代表 (亀山市立中部中学校PTA会長)	中根 直人
10	高等学校PTA代表	高等学校PTA連合会 代表 (県立神戸高等学校PTA会長)	市川 佳奈
11	小中学校教職員代表	鈴鹿市立庄内小学校 教諭	谷口 哲也
12	高等学校教職員代表	県立飯野高等学校 教諭	和田 馨